様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 ２０ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０４７１

研究課題名（和文）中原官話汾河方言群音韻史の研究

研究課題名（英文）A study on the phonological history of Fenhe subgroup of Zhongyuan Mandarin

研究代表者
秋谷　裕幸（Akitani, Hiroyuki）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：１０２６３９６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：（１）中原官話汾河方言群に属する陝西省韓城方言は、鼻音韻尾*-n、*-mの区別を体系的に保存するなど保守的な性格が濃厚で、汾河方言群音韻史の鍵となる方言の一つである。この方言に関する調査報告書『韓城方言調査研究』を徐鵬彪氏とともに執筆した。
（２）韓城、霍州、臨汾、新絳、翼城、合陽、万栄七方言から汾河方言群祖語を再構し、その音韻史的意義、方法論上の問題点等について考察した。そしてその結果を『中原官話汾河片音韻史研究』（初稿）にまとめた。

研究成果の概要（英文）：(1) The Hancheng dialect of Shaanxi province belongs to the Fenhe subgroup of Zhongyuan Mandarin. It is one of most archaic dialect of this group. For example it preserves the distinction of two final nasals *-n and *-m of Proto-Mandarin. So it is one of the key dialects of the phonological history of the Fenhe subgroup. The author wrote the research report: 'A study on the Hancheng dialect' with Dr. Xu Pengbiao.
(2) The author reconstructed Proto-Fen based on the seven modern Fenhe varieties: Hanceng, Huozhou, Linfen, Xinjiang, Yicheng, Heyang and Wancheng and studied the implication for the phonological history of Mandarin dialect and several issues of the methodology. The author wrote the research report: 'A phological history of Fenhe subgroup of Zhongyuan Mandarin (manuscript) '.

研究分野：中国語方言学

キーワード：中国語　方言　音韻史　中原官話　汾河方言群　比較方法　韓城方言

１．研究開始当初の背景

1.1 中原官話汾河方言群

中原官話汾河方言群とは中国山西省東南部および隣接する陝西省の一部地区に分布する中国語官話方言（いわゆる中国語北方方言）の一方言群である。官話諸方言の中では注目度の高い方言群の一つと言える。

この方言群が注目されてきた理由は、その通時的音韻特徴における保守的性格が他の官話諸方言と比べて著しく際立っている点にある。

1.2 中国語方言音韻史方法論

中国語方言音韻史の研究は一貫して Bernhard Karlgren (1915-26) *Études sur la phonologie chinoise* の強い影響下にあり、現代方言と中古音との比較に終始してきた。複数の現代方言に comparative method を適用し祖語を再構し、それを起点に音韻史を描き出すという発想が、Jerry Norman 教授の研究などわずかな例外を除くと、そこには存在しなかった。中原官話汾河方言群の音韻史研究もその例外ではなく、中古音の音類との個別的な比較に終始し、この方言群全体の音韻史の起点となり得る祖語の音韻体系を描き出すという試みはなされてこなかった。

２．研究の目的

本研究は、1.2 で述べた問題点を克服し、汾河方言群音韻史がもつ様々な通時言語学的意味を明らかにすることを最終的な目的としている。この目的達成のため、以下四つのより下位の研究目的を設定した（当初案）。

①中原官話汾河方言群に属する陝西省韓城方言と山西省霍州方言のデータを収集する。

②韓城、合陽、霍州、洪洞、臨汾 5 方言のデータから中原官話汾河方言群祖語を再構し、祖語から現代汾河方言群への音韻変化を跡づける。

③汾河方言群祖語の官話音韻史上の位置づけを考察する。

④汾河方言群音韻史を例に中国語方言音韻史の方法論に関する諸問題を検討する。

具体的な研究成果としては、（著書）『韓城方言調査研究』および（著書）『中原官話汾河片音韻史研究』を想定した。

３．研究の方法

3.1 フィールドワーク

汾河方言群のフィールドワークを行ったが、その内容は中国語方言学の領域で一般的に用いられている方法である。まず『方言調査字表』（中国社会科学院）に基づき字音調査を行い、同音字表を作成するとともに音韻体系を帰納する。しかるのち語彙調査を行いつつ、同音字表の増補改訂を行う。最後に短い例文を用いて文法の調査を行った。

3.2 音韻史

1.2 で述べたように、中国語方言音韻史研究においては、伝統的な comparative method が用いられることはほとんどない。そこで主に用いられているのは中国語で「層次分析法」と呼ばれる方法論である。各期標準語の諸方言に対する影響をきわめて重視する一方、各方言の内的発展を過小評価するこの方法論の確立に大きな影響をあたえた学者の一人が北京大学王洪君教授であり、その最初期の影響力の大きな論文「文白異読与畳置式音変」(1992 年)が理論の構築にあたりもっとも重要なよりどころとしたのがほかならぬ汾河方言群に属する山西省聞喜方言である。

しかし、「歴史比較法和層次分析法」（『語言学論叢』第四十五輯、秋谷裕幸、Zev Handel、2012 年）で詳述したように、中国語方言音韻史も comparative method を用いて研究することができるし、またそうすべきなのである。

そこで本研究では、comparative method を全面的に用いて汾河方言群の音韻史を研究した。

４．研究成果

4.1 フィールドワーク

音韻史研究の基礎となる音韻データ収集のため、陝西省、山西省におけるフィールドワークを行った。

4.1.1 陝西省韓城方言

もっとも時間をかけて調査したのは汾河方言群に属する陝西省韓城方言である。

この方言は汾河方言群の基本的特徴を備えている：

①中古全濁音が一律有気音で反映する。
古全濁平声　頭t^hɤu^2｜床pf^huɤ^2
古全濁上声　淡t^haŋ^5｜坐ts^{h}uɤ^5
古全濁去声　病p^{h}ie^5｜豆t^hɤu^5
古全濁入声　镯pf^huɤ^2｜橛tɕ^{h}ye^2

②宕攝・梗攝舒声の鼻音韻尾が弱化。
宕攝　汤t^huɤ^1｜养yɤ^3
梗攝　生甥ʂa^1｜听t^hie^1

③微母が v-で現れる。

武vu^{3}｜味vei^{5}｜万vã^{5}｜袜vɑ^{1}

④假攝開口三等の主母音がａで現れる。
遮tʂɑ^{1}｜车tʂ^{h}ɑ^{1}｜斜ɕiɑ^{2}｜卸ɕiɑ^{5}｜爷iɑ^{2}

さらに韓城方言は、汾河方言群祖語の音節末鼻音*-m と*-n の区別を主母音の区別として体系的に保存している。この点にこそ韓城方言の最大の音韻史的価値がある。例えば、

	祖語		韓城
“三”	*sam^{1}	＞	sɑŋ^{1}
“傘”	*san^{3}	＞	sã^{3}
“深”	*ʃiəm^{1}	＞	ʂɤŋ^{1}
“身”	*ʃiən^{1}	＞	ʂẽi^{1}

この特徴を示す官話方言は韓城方言とその黄河対岸に位置し同じく汾河方言に属する山西省河津方言だけである。また他の音韻特徴に関しても非常に保存状況がよく、語彙面でも標準語と地方標準語たる西安方言の影響が少なかった。そこで、韓城方言に関しては重点的な調査を実施した。

韓城方言については、そのデータを『中原官話汾河片音韻史研究』で用いる以外に、著書『韓城方言調査研究』を執筆した（4.4.1 参照）。

以上は“2.研究の目的”①に対応する。

4.1.2 山西省霍州方言

韓城方言の次に時間をかけて調査を行ったのが山西省霍州方言である。

上述した通り、汾河方言群では中古宕攝と梗攝の鼻音が弱化する。そしてほとんどすべての汾河片方言においては、韓城方言のように鼻音成分を完全に失ってしまう。その中にあって、鼻音成分を保存しているのがこの霍州方言であり、汾河方言群音韻史研究にはこの方言のデータが必要不可欠なのである。例えば（鼻音成分を失った韓城方言も例に挙げる）、

	祖語	霍州	韓城
“听”	*t^{h}iæ̃^{1}	tɕ^{h}ĩ^{1}	t^{h}ie^{1}
“横”	*xuæ̃^{2}	xɔ̃^{2}	ɕyɑ^{2}
“桑”	*sɔ̃^{1}	sɔ̃^{1}	suɤ^{1}

霍州方言のデータは『中原官話汾河片音韻史研究』で用いる以外に、語彙と文法の部分を著書『韓城方言調査研究』(4.4.1 参照）の附録とし、同音字表については『中原官話汾河片音韻史研究』(4.4.2 参照）の附録とした。

以上は“2.研究の目的”①に対応する。

4.1.3 山西省翼城方言

翼城方言はこれまでにほとんど知られていない汾河方言群方言であった。研究開始後《翼城方言研究》（吕美红 2006 年、苏州大学硕士论文）に接し、この方言に他の汾河方言群方言では失われた特注が保存されていることを見いだした。それは次の特徴である。

	祖語	翼城	韓城
“力”	*liʔ^{7}	li^{1}	lei^{1}
“立站立”	*li<u>ʔ</u>^{7}	liə^{1}	lei^{1}

*iʔは*ikに、*<u>iʔ</u>は*itにそれぞれ遡ると考えられるが、直接的な証拠がないので暫時アンダーラインによって区別した。*ikと*itの区別は、現代方言・歴史文献とも官話方言には見いだすことができないものである。翼城方言を調査しなければならない理由はこの点にある。時間の関係で、『中原官話汾河片音韻史研究』(4.4.2 参照）で取り上げた語のみを集中的に調査した。

4.1.4 山西省柳林方言

研究の過程で、汾河方言群と晋語呂梁方言群の関係を検討する必要が生じたため、呂梁方言群に属する柳林方言のフィールドワークも実施した。

柳林方言では“製、痴、池、遅”等が、例えば“遅”[ts^{h}ɛe^{2}]のように[ɛe]という韻母で現れ、[ɿ]や[ʅ]などの舌尖母音を発達させていない。現代汾河方言群諸方言においてはこの特徴は観察されないが、汾河方言群祖語にまで遡ると“製”に*tʃi^{5}が再構されるなど、柳林方言と同じ特徴を見いだすことができる。

このように汾河方言群と共通する音韻特徴が呂梁方言群には数多く観察されることから、汾河方言群音韻史研究に呂梁方言群の音韻データが不可欠と考え、柳林方言のフィールドワークを実施したのである。

4.2 汾河方言群音韻史の研究

フィールドワークで得たデータ、及びこれまでに公表されている方言データを用い、汾河方言群音韻史の研究を行った。当初の予定では韓城、合陽、霍州、洪洞、臨汾 5 方言を用いる予定であったが、様々な状況を鑑み、韓城、合陽、霍州、新絳、臨汾、万栄、翼城 7 方言のデータを最終的に用いた。このうちフィールドワークで得たのは 4.1 で述べたように韓城、霍州、翼城 3 方言のデータである。

伝統的な比較方法を用いて汾河方言群祖語を再構し、そこから現代汾河方言群への音韻変化を跡づけた。

その上で、汾河方言群祖語の官話音韻史上の位置づけを考察した。詳細については省略せざるを得ないが、汾河方言群祖語が文献に反映された 9、10 世紀の西北方言と近い関係にあり、両者を比較することにより、より古い段階の共通祖語を再構することが可能であることを示した。これらについては 4.4.2

に掲げた『中原官話汾河片音韻史研究』の“7 原始汾河片在北方方言音韵史上的位置”で詳述し、また“5. 主な発表論文等” 〔学会発表〕（２）「中原官話汾河片在北方方言音韻史上的位置」において口頭発表を行った。

以上は“2.研究の目的”②と③に対応する。

4.3 汾河方言群語彙史の研究

comparative method を用いた音韻史研究は語彙史研究と表裏一体の関係にある。そのため、本研究においても一部の語彙について歴史的研究を行った。『韓城方言調査研究』（4.4.1 参照）第八章「韩城方言特征词语例析」で取り上げた 27 語や“5. 主な発表論文等”〔雑誌論文〕（３）「漢語「聞／嗅」義詞的現状與歴史」で取り上げた「嗅ぐ」などがその例である。この方面の研究においては、浙江大学・汪維輝教授と共同研究を行った。

4.4 中国語諸方言音韻史研究方法論

本研究の重要な目的の一つに、中国語方言音韻史方法論の検討がある。汾河方言音韻史研究を中国語諸方言音韻史方法論の包括的再構築の足がかりとすることを目指したのである。

この研究目的に関しては、掲げた『中原官話汾河片音韻史研究』(4.4.2 参照）の“1 前言・1.3 构拟原始中原官话汾河片的方法”および“3 原始汾河片构拟中的几个问题”で詳述した。汾河方言群は西安方言の影響を強く受けている。その影響が“借用”の段階なのか、それとも借用を超えて自立的かつ規則的な音韻変化に転化したものなのか、この点の見きわめが汾河方言群音韻史研究においては非常に重要である。この問題が音韻史構築の障害となるのは汾河方言群だけではなく、程度の差こそあれ他の中国語方言においても同様であり、その意味で本研究において行った方法論的検討は、中国語方言音韻史研究全般に対して有意義であると考えられる。

以上は“2.研究の目的”④に対応する。

4.4 研究成果発表（発表予定も含む）

4.4.1『韓城方言調査研究』の出版

4.1.1 で述べたように、陝西省韓城方言については研究期間中に詳細な調査を行った。そしてその結果を『韓城方言調査研究』としてとりまとめた。目次は次の通り：

第一章　导论
第二章　韩城方言音系分析
第三章　韩城方言同音字汇
第四章　韩城方言的共时音变
第五章　韩城方言的音韵特点和文白异读
第六章　韩城方言本字考
第七章　分类词表
第八章　韩城方言特征词语例析
第九章　构词法
第十章　句法
附录　霍州、韩城方言对照
参考文献

文法に関する第九章と第十章を共著者・徐鵬彪氏が執筆した以外は、すべて私が執筆した。本書は 2016 年中に中華書局（北京）から出版される。

4.4.2『中原官話汾河片音韻史研究』初稿

本書については研究期間中に正式出版にはいたらなかったものの、初稿を完成させることはできた。目次は次の通り。章のタイトル以外に、重要と思われる節のタイトルも挙げる：

1 前言
　1.1 官话方言音韵史的设想
　1.2 从音韵史的角度来看中原官话汾河片的研究价值
　1.3 构拟原始中原官话汾河片的方法
2 七个汾河片方言以及三个参考点方言的音系
3 原始汾河片构拟中的几个问题
　3.1 中古音和现代汾河片方言之间一对多的语音对应
　3.2 方言接触所造成不成规律的语音对应
　3.3 方言接触所引发的自身语音演变
4 原始汾河片音系的构拟
　4.1 声母的构拟
　4.2 声调的构拟
　4.3 韵母的构拟
5 从原始汾河片看七个现代汾河片方言的音韵特点
6 原始汾河片与中古音比较
7 原始汾河片在北方方言音韵史上的位置
　7.1 原始汾河片中值得注意的存古现象
　7.2 原始汾河片中值得注意的创新现象
　7.3 与历史音韵材料比较
　7.4 宋西北方言和原始汾河片
　7.5 小结
附录
　1 中古音音序索引
　2 霍州方音
参考文献
后记

本初稿の中核をなす汾河方言群祖語再構の部分は以下のような体裁になっている：

带名词　霍州tai^{5}｜临汾tai^{5}｜新绛tai^{5}｜翼城tɛi^{1}皮～｜万荣tai^{5}皮～｜韩城tai^{5}裤～｜合阳tɛ^{5}｜汾河*tai^{5}；西安tɛ^{5}裤～｜蒲县tai^{5}字音｜岚县tei^{5}裤～；LMC taj`｜河西—；

臺戏～子　霍州t^{h}ai^{2}｜临汾t^{h}ai^{2}｜新绛t^{h}ai^{2}晒～：阳台｜翼城t^{h}ɛi^{2}｜

万荣$t^h ai^2$～子：戏台｜韩城$t^h ai^2$｜
合阳$t^h ε^2$戏～儿｜汾河*dai^2；
西安$t^h ε^2$戏～｜蒲县$t^h ai^2$圪～：台阶｜
岚县$t^h ei^2$戏～子；LMC tɦaj｜河西一；

西安、蒲県、嵐県方言は汾河方言群と関係が深い方言であり、参考に資するために挙げた。“LMC”は後期中古音、“河西”は文献から推定される 9、10 世紀の敦煌一帯の方言である。

なお本初稿については、北京大学関係の出版社から出版する計画が進行中である。

4.5 研究の今後の展開

4.5.1 官話音韻史研究

『語言学論叢』（北京大学中国語言学研究中心）第五十五輯（2017 年）に掲載が確定している「重建官話方言音韻史的設想」で詳述したように、汾河方言群祖語は他の官話方言では失われている多くの通時的音韻特徴が保存されている。官話方言音韻史研究は汾河方言群音韻史研究を前提としているとさえ言うことができる。そこで、今次の「中原官話汾河方言群音韻史の研究」に引き続き、官話方言全体の音韻史研究が構想される。

官話方言音韻史は従来主として歴史文献に基づき展開され、膨大な研究業績を蓄積してきた。現代官話諸方言のデータから描き出される音韻史と文献に基づいた音韻史をつきあわせることにより、官話音韻史研究をよりいっそう深化させることが期待される。また、中国語方言音韻史研究の方法論を再検討するきっかけともなろう。

4.5.2 官話方言と晋方言

官話方言と山西省に分布する晋方言との関係は、中国語方言学の領域において長らく論争のまとであった。中国社会科学院の見解では、晋方言は官話方言と同様、中国語諸方言のもっとも高いレベルで分立される方言群ということになっている。しかしながら、この見解に対しては、北京大学王福堂教授のように異論をもつ研究者も少なくない。

この問題に、音韻史の観点から決着をつけるためには、官話方言祖語と晋方言祖語を再構し、両者を比較する必要がある。官話方言祖語に対しては、上述したように、今次の研究で再構した汾河方言群祖語が大きな役割を果たすことが期待される。晋方言祖語についてはまだ研究がほとんどなされていない。晋方言祖語の再構においては、汾河方言群と隣接して分布する晋方言呂梁方言群が重要である。晋方言のなかでこの方言群がもっとも保守的であるからである。そしてこの方言群をより深く理解するためには、汾河方言群に対する理解が必要不可欠である。

『中原官話汾河片音韻史研究』において、私は呂梁方言群との関連についてもしばしば言及している。今次の研究は「官話方言と晋方言」という、学界が注目するテーマに対しても、積極的な意義をもつことが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

（１）「重建官話方言音韻史的設想」。『語言学論叢』（北京大学漢語語言学研究中心『語言学論叢』編委会）第五十五輯に掲載確定。

（２）「呉語中表示“左”的本字」。『語文研究』２０１５年第４期（総第１３７期）、１５－１８頁。中国語。査読あり。秋谷裕幸、汪維輝。二人中一番目。２０１５年１１月１０日。

（３）「漢語「聞／嗅」義詞的現状與歴史」。*Language & Linguistics* 15-4,pp.699-732。２０１４年７月。中国語。査読あり。汪維輝、秋谷裕幸。二人中二番目。

〔学会発表〕（計　２件）

（１）「呉語中表示“左”的本字」。日本中国語学会第 64 回全国大会。2014 年 11 月 16 日。大阪大学（大阪府・箕面市）。秋谷裕幸、汪維輝。二人中一番目。中国語。

（２）「中原官話汾河片在北方方言音韻史上的位置」。日本中国語学会第 63 回全国大会。2013 年 10 月 27 日。東京外国語大学（東京都・府中市）。秋谷裕幸。中国語。

〔図書〕（計　１件）

（１）『韓城方言調査研究』。中華書局（北京）。中国語。秋谷裕幸、徐鵬彪。二人中一番目。２０１６年中の出版確定。

６．研究組織

(1)研究代表者
秋谷裕幸（AKITANI, Hiroyuki）
（愛媛大学・法文学部・教授）
研究者番号：10263964